

# 山と博物館

第45巻 第2号 2000年2月25日

市立大町山岳博物館



「明けゆく木立の静けさ」谷川岳にて

撮影 大石 高志

## 静 — 自然からの感性 —

平林 照雄

二十世紀は自然科学の進歩と、戦乱の時代といわれます。新世紀は人類の滅亡にかかわる地球保護が課題だといわれます。最近では地球的には予知できない天災や人災が相次ぎ、また人間不信が社会を苦しめております。その主な原因は地球そのものを知らずして、自然科学万能を著つてきた結果です。人間の欲望のままに自然を改造し破壊してきました。人間も自然物の一員である謙虚さを忘れた自殺行為です。

自然から学びとれる感性は幼少の時ほど敏感です。純真で素直な感受性は、生活に翻弄されている大人社会に望んでも無理です。

特に子供と大人の社会が混同している現代では、果てしない宇宙への夢や、直接見ることのできない地球の神秘への関心をもたせたいものです。しかし新しい発見や知識は大切な進歩ですが、その裏に潜む予測できない逆効果は既に二千年問題で自明のことです。

何はともあれ私は恵まれた故郷の自然の懐で、自分の足で歩き、自分の目で見て、自分の考えで、しかも激変する時の流れに惑わされずに生きて来ました。現在の理科離れや進学や就職の苦労は知りませんでした。これが社会的にどう評価されるかは別として、子供の時の豊かな感性の獲得が、社会人としての生き方の糧になったのは確かだと思います。

小学校一年の時、北アルプスの麓を流れる純白の高瀬の河原で集めた「石ころ」が、後年鉱物岩石となり、地質学の授業や研究になり、地下資源の探査や自然災害の役に立って生涯の支えになろうとは知りませんでした。

人生は「何をやるか」より「好きなことを自分からやり続けること」だと思います。今になって「人生は石に始まって石に終わる」の名言が、少しは理解できそうです。

## 山仕事の古今(後編)

## 狩野清高

平成十一年八月二七日から二九日にかけて、大町市教育委員会生涯学習課文化財係によって同市鹿島集落の民俗調査が行われた。調査は国学院大学・倉石忠彦教授(同市文化財審議委員)と跡見学園女子大学・倉石あつ子助教授と学生らによる聞き取りを中心に進められた。

その調査に一日参加し、実際に鹿島集落の方からお話を聞く機会を得た。その中でも山仕事のお話は大変興味深いものであった。

そこで同年一月三〇日、山との関わりについてあらためてお話をうかがうために鹿島集落へ足を運び、昔をよく知る狩野清高さん(大正十二年三月一日生)を訪ねた。鹿島槍ヶ岳の麓に拓ける鹿島集落では、里山も含めた周囲の山々とのように付き合ってきたのか。これはそこでお話いただいた内容を編集したものである。

(編集部)

## 1. 小屋掛け―一坪半での食住―

山で炭焼きしているときには小屋掛けをし泊まったです。泊まった小屋っていうのは、一坪くらいでもんですねえ。間口が三尺、奥行きが六尺、そうするとだいたい一坪半か。そこで寝泊りしてたで、そのくらいなけりやねえ。萱葺でね。山にある丸太で組んでね。最初はそんなトタンなんてものはなかったんですよ、だから山にある萱から草から、それから木の皮。伐採した木の皮がむけるから、そういうものを利用して屋根を葺いてね。

こんだ(今度)昭和二〇年過ぎになつたらトタンがでてきたから、そうならみんなどトタンを持ってきて屋根にしたんです。ただ、

壁だけはトタンじゃだめだつてことで萱でやったり、木の皮でやったりね。それで一番の入り口のところにちよつとした囲炉裏を作って、昔の鉤付様(自在鉤のこと、囲炉裏の上からつるし、鍋などをかけ、自由に高さを調節できる鉤)っていうかを下げて飯を炊いたりお湯を沸かしたりしてたんです。

## 2. 名前のない沢はひとつもない

山の中では全部沢ごとに名前が付いているからね。国有林内には複数の「リンパン」っていうのがあるんですよ。これは鹿島の谷、高瀬の谷、小谷の谷、白馬の谷、これ一帯でずっとリンパンがある。鹿島にリンパンから一六リンパンまであって、爺ヶ岳のスキー場からちよつと上に来たところの東から一リンパンっていつてね。その中に沢の名前が全部ついている。

例えば、一リンパンの中にね「ミナミサルガジョウ」とか、「エンジャイリ」とか、「ナリサワ」とか。そういう名前は全部この辺の人がつけたことだね。これが全部沢々にあって、名前のない沢はひとつもない。沢ごとに全部あります。

だから、あの家はどことこの沢、この家はどことこの沢っていうふうに使事する山を分けたんです。この辺の人は沢の名前を聞けば、どこの沢のことかわかったね。

## 3. 山が商売、「山の神」を怒らせない

山では沢ごとに大きな老木を見つけて「山

の神」を祀ったけど、ないところはしようがないから、次の沢にあればそこへお祀りをしてやっただです。山が商売だから山の神様っていうのをまず第一に怒らせないように、これはもう年寄りから厳しく言われたね。だから山の神を祀った木は尊敬して絶対に傷付けな

りは三月十七日のお宮(鹿島神社)「写真1参照」のお祭り、その日は一同に集って山の神をお祀りする。「これから山へ入って仕事をやります」って、神主さんから拝んでもらって山へ入ったんですけどね。それだから、三月十七日っていうのは山をやる関係で一番大事な日でしたな。

どこの山へ入ってもだいたい大きな木があればそこへ剣をあげたりして山の神を祀ったです。三メートルの高さのところへ剣を三本ほど釘で打ち付けてね。剣は鍛冶屋に作ってもらいました。あと、その木にお神酒と、米、塩、野菜、魚などの供物をあげて山へ入ったね。

薪を切り出していた時分、山仕事のはじま

4. 山での恐怖―川の氾濫・クマ・雪崩―  
山に入って一番怖かったのは、この鹿島川が氾濫することだね。さあ、朝は山へ出て行って泊まって朝方に寒出しをしたところが、川が氾濫して帰ってこられなくて、山の中をつたうしても帰ってこられなくて、山の中をつたわって鹿島橋まで降りてきて、そして渡って帰ってくるとかありましたね。そりゃ、こんなことはあんまりなかったがね。

あと怖かったのはクマだ。秋なんかになるとクマを気をつけなくて。クマはいっぱいたから。ただ、昔は自由に獲ってよかつたから、クマも警戒して今のように出てこなかつたです。

それとこれは私のおじいさんから聞いた話だが、雪崩の恐ろしさがある。鹿島槍のカクネ里の反対側が大沢っていう沢があつて、昔はここまで木を払い下げていてもらっていたらしくてね。そのころ冬にこの部落のみんなでカモシカ狩りに山へ入り、その大沢で雪崩に遭ってしまった。山をひとつ越えてきたほどの大きな雪崩だったそう、みんな亡くなったことだね。けれども、私の家の本家にあたる人は、そのカモシカ狩りに行ってなかつたそうでひとり助かったそう。まあ、そういう話も聞いたことがあるね。

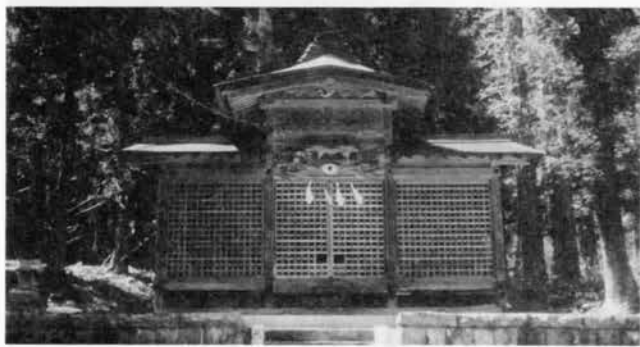


写真1. 鹿島神社(大町市平鹿島)

平安時代初期の大同元(806)年にこの地域一帯で大地震が起り、これをきっかけに地震除けの神様である鹿島明神をこの地に勧請したという。

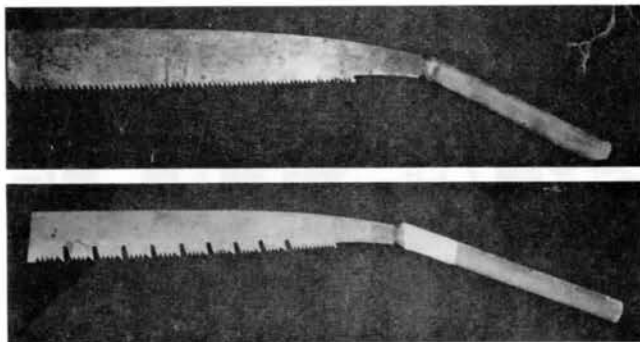


写真2. 山仕事で使った鋸(上・長さ92cm、下・長さ84cm)

こうした山仕事で使った道具は鹿島集落を訪れる行商人や市内の商店から手に入れた。写真の鋸は「尺八寸の鋸」という意味で「シャクハチ」と呼んだ。

### 5. 帳面で道具を手に入れる

山で使う道具ってのは、鋸(ノコ)とか鉋(ナタ)とか齧(トビ)で「写真2参照」、それを売りに来る行商人の人が決まってるね。大町では今でもやっている島田の鋸屋。もとは大黒町に店があって、このおじいさんが昔から鋸を持ってさちやあ売りさばいて。もうひとつ大黒町に西沢っていう鋸屋さんがあって、この人が鹿島部落との付き合いがじつと(いつも)あった。それから諏訪あたりからも鋸屋さんが昔から売りに来てました。

昔、この部落っていうのは帳面につけて物を買ってきて、お金つてものは一切払わなかった。それこそ、イワシ一匹買うのにも魚屋へ帳面を持って行ってつけてもらう。お金

つていうものは全然持っていないから、呉服

でも酒でも何でもみんな帳面。まあ、信用があったってことでしょね。それだから、一年中金なんか払わないで鋸でもなんでも道具はほとんど手に入れて、そしてその年の終わりに木を売ってから金を払うようにしてね。

今の香典帳みたいな帳面になっていて、例えば魚屋なら「かねまさ」、呉服屋なら「ますなお」、酒屋は「いちのや」っていうように店の屋号ごとに帳面ができていてね。それでこんだ、いよいよこの精算っていうのが旧年の一月。それまでに流していった木を売り上げて、全部薪との交換で精算をしたってことだ。薪を納めていない店からは物を買わなかつたからね。もつとも昔は薪よりほかに燃料がなかったからね。

今考えてみるとまったくでたらめっていうか、のんびりしていたもんです。店の方でも鹿島の人ならいいですよって、いけないって言わないから物が自由に買えたね。さあ、それだから金も残らないわけだ。精算をした、みんな金は終わっちゃったってね。まあ、終わってもいいわけだ。また次の年になれば、ちゃんと帳面でつけてくれるから。まあそれも昭和七、八年の川流しをしたときだけのことで、それ以後はこんなでたらめなことだめだということをやめになったがね。

### 6. 夜と冬の仕事は草鞋作り

自分たちが山仕事をするようになってからは、もうほとんど草鞋(ワラジ)は履かなかつたね。その代わり冬は「シツペンソ」っていうね、ワラの上と下を合わせたスリッパみたいな履物を作って履いていました。がね。炭を焼くようになってからは夏ほとんど地下

足袋。でも、私のおじいさんたちまでは、ほとんど草鞋だったね。

それで炭焼に行くのにべらべらした薄い股引(モモヒキ)、あれをみんな穿いたですよ。そして上はシャツ。ほろシャツみたいなを着て。

そして雨具はカツパなんかなかったから蓑笠(ミノカサ)でね。作れる人は自分で作って、そうでない人は買ってくる。昔から大町の「まるせ」の店からそういうものは買ってきたがね。

こういうのは親から教わってみんな自分で作って履いたただね。大町へ行って木を売ってさばいたときの夜の仕事がそれ。まあ大町へ木が着いてしまうと、後は遊んでるようなものさ。昼間は木材を積んで売るところへ話をして持ちに来てもらって、夜は何にも仕事がないから、夜のうちにその年で履く草鞋を作ったりした。それから、冬の間は三月まで家で休んでいたわけだから、その間に近所の人が行ったり来たりして、草鞋を作ったり縄を編んだりそういうことをみんなやった。

でも、自分たちになつてからは草鞋くらいは作つたが、糞とかは難しくて作らなかつたがね。

### 7. 庚申講の夜

この部落でやる講はね、「オカノイ仲間」っていう庚申講。これは今でも毎月やっています。うちの部落は一軒だから、一ヶ月間抜かして一ヶ月毎月やる。それで昔は庚(かのえ)申(さる)っていう暦の日に家回りで全部やっていたんです。正月のときにくじを引いて、例えば私が三月引けば三月、というように当たった月になつたら当番でや

つたです。

それでね、その年最初と最後の講にあたる初度(ハツド)と詰度(ツメド)というのはご馳走をするんで金がかかる。毎年くじ引きするから、同じ月が当たる人は何年も続けてやるわけです。それをやっていた当時は女衆がとて苦勞するですよ。ご馳走を用意するし、男衆はいつまでも一二時だろが一時だろが酒を飲んでいて、それでけんかする人もいてね。もうこんなことはだめだということになつて、今は公民館でやっていますよ。

### 8. 「炭焼き」から「サラリーマン」へ

この部落の人がいよいよ炭焼きをやらなくなってきたら、今度は部落の人ほとんどが国有林の仕事に就くようになったです。私は昭和三年からずっとその仕事を続けて、二年間山へ入りましたがね。その当時は部落の人なら男でも女でも誰でも雇ってくれるつてような形で、一軒で何人でも国有林の仕事に就いたね。

それでも一軒で大勢人手のあった家は、まだ昭和三〇年過ぎころまでも炭を焼きましたですか。けども、ほとんどもう三五年ころからは炭焼きをする家はなくなりましたね。そのころになると昭和電工っていう大きな工場できたから、若い人はこんだみんな工場務めのサラリーマンになつたつてわけです。

私だつてもう年寄りですから、今まで話したことには間違つた点があるかもしれないが、まあ、これはあくまでも自分の聞いたこと、それとある程度経験したことです。それでたためたことではないと思いますよ。

# 北海道における猛禽類の現状 — ワシ類の鉛中毒 —

黒沢信道

北海道には雄大な自然が残されており、スケールの大きな猛禽類が生息しています。その代表はオオワシとオジロワシでしょう。しかしこれらのワシ類も、人間活動と全く関係なく暮らしているわけではありません。

## ワシの生活の変遷

彼らの本来の餌は、河川に遡上するサケや水鳥、海岸にうち上げられる海獣類の死体だったと考えられます。現在はサケを河口で捕獲してしまつたため自然遡上はほとんどなく、ワシ達は一時期、根室海峡で盛んだったスケソウダラ漁からこぼれ落ちる魚に頼つて、羅臼町沿岸に集中していた時期もありました。

十年ほど前からこの漁にもかげりが見え始め、ワシ達は再び新たな餌を求めて分散していきましました。ちょうどその頃、北海道の内陸部ではエゾシカが増加し農林業被害が深刻になったため、狩猟と駆除が盛んに行われるようになりましました。ワシはこれらの放置死体を新たな餌のレパートリーに加えたのです。

## シカの死体から生じた鉛中毒

一九九五年頃から、内陸部で衰弱したオオ



写真 鉛中毒と判明した多数のオオワシ死体

そこで私達は、北海道で取寄せられたオオワシとオジロワシのすべての記録を集めて検討しました。その結果九八年度には、驚くべき発見がされました。ワシの総死亡数のうち約八割が鉛中毒死であることがわかったのです。八割を占めると言うことは、言い換えれば「新たに鉛中毒が生じたために、ワシの死亡数が五倍にはね上がった」ということなのです。これは

ワシやオジロワシが保護されたり変死体で見られるなど、今まで見られなかった奇妙な現象が起こってまきました。九六年にはこれが鉛中毒であることが判明し、その原因はエゾシカの射殺死体を食べたことによるものと疑われました。

エゾシカ猟では広くライフル銃が使用されていて、ほとんどの弾丸は鉛を含有しています。その弾がシカに当たると、傷の周囲に砕け散つた鉛の破片が残留することも証明されました。銃創の周囲は食用にならないので山の中に放置されることが多く、これをワシが食べて鉛中毒になったのです。

## 計りしれない鉛の影響

さて因果関係が解明されたにもかかわらず、鉛中毒の被害にあつたワシの数は年々増加を続けましました。グラフに見るとおり、九八年度に発見された鉛中毒死は二十五件にも達しました。オオワシとオジロワシの生息総数はおよそ二千羽ですので、二十五羽はたいした数字でないと思われるかも知れません。しかし被害は深い山の中で起きていますので、発見される数は氷山の一角であり、実際の被害数は正確にはわかりません。

たいへんな数字です。

さらに研究者らは、中毒死だけが鉛の被害ではないと警鐘を鳴らしています。鉛には内分分泌作用（いわゆる環境ホルモン作用）があると言われており、鉛を体内に吸収した場合、死に至らないような低濃度でも、繁殖能力が低下するなどの影響が考えられるといふのです。鉛中毒の影響は、現在明らかになつていいる死亡の上に、更に将来にわたつてワシ類に重くのしかかって来ると考えられるのです。

## 進む防止対策

行政やハンター組織もこの状況を重大にとらえ、対策を始めました。

鉛中毒の防止には、当面ふたつの方法が考えられます。ひとつは有害な鉛を含有しない銃弾を使用すること、もうひとつはシカの死体を野外に放置しないことです。ただし半矢方法だけでは完全ではなく、第一の方法が基本になることは明らかです。

現在シカ猟の盛んな地域では、地元市町村が不要死体の回収ボックスを設置してハンターに利用を呼びかけており、マナーの向上は次第に浸透してまきました。また北海道庁は、シカ猟での鉛製ライフル弾の使用を来年

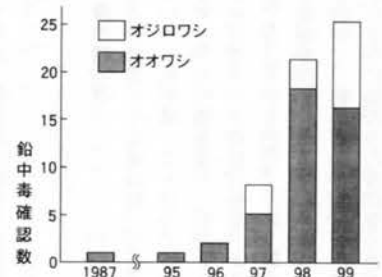


表 ワシ類鉛中毒発生確認数の推移 (1999年6月までに判明した分)

秋より禁止すると発表しました。ただ、これは言うほど簡単ではありません。鉛の飛び散らない銃弾も急速に普及していますが、弾丸の種類を替えると照準の再調整なども必要になって、ハンターにも努力が要求されます。また規制が守られているかどうかを調べていく必要もあるでしょう。

## 道外にもある鉛の危険

さて私達はこの二年間、鉛中毒に関係するいろいろな情報を得てまきました。その中には、オオワシとオジロワシの他に、イヌワシやクマタカがシカの死体を食べている観察記録もあります。

幸い北海道では鉛弾の規制が始まりますが、鉛汚染は北海道だけに限らないと私達は考えましています。本州でもシカの増加や狩猟数の増大があります。その死体を餌とするワシ類が観察されていいます。鉛弾による猛禽類の汚染は、水面下で拡大しつつあるのではないかと思います。ただ公式に報告がありませんので、環境庁でも対策に踏みきれないでいようです。

私達は現在までに、死体であればたとえ白骨でも、また糞便からでも鉛汚染を知る方法を工夫してあります。心あたりの方はご相談下されば、助言をさし上げられます。全国の猛禽類に忍び寄っている鉛中毒の危険を防止するために、何らかの手助けになれば幸いと考えています。

(ワシ類鉛中毒ネットワーク代表  
ワシ類鉛中毒ネットワーク事務局  
〒〇八四一〇九二二  
釧路市北斗二二二〇一  
北海道野生生物保護公社内 斉藤方

山と博物館 第45巻第2号  
発行 千〇〇〇  
398-長野県大町市大字大町八〇五六一  
市立大町山岳博物館  
TEL 〇二六二一二〇二二  
FAX 〇二六二二二二二二  
印刷 奥村印刷  
定価 年額一、五〇〇円(送料共)(切手不要)  
郵便振替口座番号〇五四〇一七一一三九三

現在シカ猟の盛んな地域では、地元市町村が不要死体の回収ボックスを設置してハンターに利用を呼びかけており、マナーの向上は次第に浸透してまきました。また北海道庁は、シカ猟での鉛製ライフル弾の使用を来年